2011、10、12　朝日新聞

井上道義の未来だった今より

響け　日比谷公会堂

日比谷公会堂という2千人収容の古いホールが東京の日比谷公園にある。関東大震災のすぐ後に建てられたためか、いまだに不具合がない……。イヤそれは全くのうそ！　使う側や観客にとっては古色蒼然として不便で使いにくい。今、東京都は建て直すことなく、戦前戦後の日本のクラシックの殿堂をこれからも魅力あるコンサートホールとする気で改善作業を進めている。1945年6月、東京がほとんど焼け野原だったときも、N響の前身だったオーケストラは定期演奏を絶やさず、第九などを演奏していたのだ。

1980年代以降のコンサートホールブーム以前、それどころか日本の高度成長期以前のものであり、残響重視のホールと哲学が違う実に個性的な音響を生み出す。作品を選べば臓腑が直接握られるようで素晴らしい感触。日本には、アンサンブル金沢と新日本フィルハーモニー以外、練習と公演を同じ場所でやれる団体がないが、実は日比谷公会堂に一つのオーケストラが常設されたら世界で最も個性的な響きのオケになると夢想する。本当にスッピンな音響を持つ公会堂。石造りのキリスト教会堂などから派生した天の神に向かう響きでもなく、舞台の後方にも客席がある祝祭的なワインヤード形式でもない。「まるで茶室で人と相対するように近い、しかし2千人がいる感触」と言ったら、まるでわびさびの茶人のようで僕の口から出ると異様だろうが。

オーケストラの個性は指揮者や楽員たちの生き方や街の雰囲気が作り上げるが、本当はホールそのものが作るものだと信じている。信じているだけだから間違っているかもしれないが。

（オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督）